

英語辞書に関する学生の意識について

佐々木 隆

プロローグ

英語教育全般が「使える英語」を謳い文句にいわゆる会話系、発話系の授業に焦点が当てられている。現行の学習指導要領においては、コミュニケーション能力を育成し、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく育成することが求められている。しかし、新しい学習指導要領では「聞く」「話す」「話す（発表する）」「読む」「書く」の5技能となっている。これに伴い授業自体も「話す」「話す（発表する）」に重点が置かれるようになってきていることは周知の通りだ。筆者は大学の授業において“Reading & Writing”を重視するクラスと“Speaking & Listening”を中心にするクラスをここ数年担当している。その中で強く感じているのが学生の英語辞書に関する考え方、意識の変化である。本稿では学生の英語辞書に関する意識と英語の指導上の英語辞書の役割について考察していきたい。

1 学生の英語辞書の利用状況について

筆者はこれまで学生の英語辞書の活用について取り上げてきたが（佐々木 a）（佐々木 b）（佐々木 c）（佐々木 d）、英語辞書について、実際どのような利用状況であるかを“Reading & Writing”を重視するクラスにおいて、2017年4月14日と2019年4月12日に調査を行った。調査に際しては事前の説明等を行わず、主に大学生になってからの状況として尋ねた。なお、調査結果は 分母が異なるため、割合で表示する。

調査対象：大学2年生（2017年：102名、2019年：69名）

（英語の選択必修科目・英語を専門にしない学部・学科に所属）

「Q1 あなたはふだんどんな英語辞書をメインに使っていますか」
なお、回答については複数回答なしとした。

- A 紙辞書 B 電子辞書 C スマホ等の内蔵辞書
D オンライン辞書

	紙辞書	電子辞書	スマホ等内蔵辞書	オンライン辞書	未回答
2017 調査結果	4.9%	42.2%	33.3%	19.6%	0%
2019 調査結果	10.2%	59.4%	17.4%	11.6%	1.4%

(2017年調査結果は2019年調査結果と比較するため、一部改変)

当初の予想では、紙辞書の割合が一段と減少し、電子辞書の割合は増加し、スマホ等内蔵辞書の割合は減少するのではないかと考えていた。筆者の仮説は以下の通りである。

・紙辞書

例文などを見るには便利であるが、携帯性の点から利用度が減るのではないかと考えていた。

・電子辞書

利便性から言っても、さらに利用度が上がるのではないかと考えていた。

・スマホ等の内蔵辞書

大学1年生の時にはこれをかなり使っていた学生がいたかもしれないが、実際にスマホ等の内蔵辞書で済ませようとしていたが、実際には単純な意味の確認程度ならよいとして、例文や前置詞の使い方や収

録語語彙数から言っても不足を感じ、利用度は減るのではないかと考えていた。

・オンライン辞書

大学も wi-fi が整備されているが、利用度が増えるかどうかは疑問に思っていた。電子辞書等で載っていない場合のみ、補足的にオンライン辞書を活用するのではないかと考えていた。電子辞書等と比較すれば、収録語彙数は無限だが、反応等からみても時間がかかるため、メインでの使用がどの程度伸びるかはあまり期待していなかった。

仮説と実際の調査結果で、合致しないところは「紙辞書」の活用度が上がったことだ。

2 学生が感じている英語辞書への意識

2017年調査では実施しなかったが、2019年調査では自由記述（69人分）で各辞書の長所と短所を記載してもらった。以下、同じような表現のものは省略し、列挙していきたい。

紙辞書の長所

- ・例文が豊富。
- ・関連した語や簡単な例文が同時にわかる。
- ・調べる単語や文章を以外を見れる。
- ・自分で探すことによって記憶に残りやすい。
- ・書き込みができる。

紙辞書の短所

- ・重く、大きく持ち運びにくい。
- ・使用者が慣れないと調べるのに時間がかかる。

- ・発音が聞けない。

電子辞書の長所

- ・慣れていなくても瞬時に調べられる。
- ・発音・アクセントも同時に調べられる（理解できる）。
- ・小さく、軽いため、持ち運びに便利。
- ・複数の辞書を所有できる。

電子辞書の短所

- ・紙辞書に比べると情報量が少ない。
- ・イデオムや例文が調べにくい。または、調べられないことがある。
- ・調べた時だけわかって何日かしたらすぐに忘れる。
- ・調べた単語しか調べられない。（表示されない）
- ・文字を打つのに時間がかかる。
- ・字が小さくて、調べにくい。
- ・本体そのもの、電池なども費用がかかる。バッテリーが切れると使えない。
- ・ラインマーカーをひけない。

スマホ等内蔵辞書の長所

- ・スマホ内にあるから荷物にならない。結果がすぐ出てくる。
- ・片手ですぐ調べられる。
- ・操作が慣れている。
- ・紙辞書や電子辞書と違い、必ず携帯しているのでいつでも利用できる。
- ・無料。
- ・スペルがわからなくても音声で検索できる。

スマホ等内蔵辞書の短所

- ・自分の力にはあまりならない。
- ・調べた単語しか調べられない。(表示されない)
- ・正確な訳が出て来づらい。
- ・授業中使うと怒られる。禁止されている。授業中使うと、関係ないことに使っていると思われる。
- ・他のゲームをしてしまう。他の機能を使ってしまう。

オンライン辞書の長所

- ・構文や熟語を調べるのが楽。
- ・少し打てば単語が出てくるので楽。
- ・いつでもどこでも利用できる。
- ・オンライン上で他に気になったこともすぐ調べられる。他のサイトでも情報が得られる。
- ・用例が多い。
- ・速い。(使い慣れているのですぐに調べられる)
- ・最新の情報がくみこまれていそう。音声付。

オンライン辞書の短所

- ・間違っていたりする。
- ・ブラウザ(サイト)を開くのが面倒。
- ・ネット環境が無ければ使えない。圏外だと使えない。
- ・情報が多すぎる。
- ・広告が邪魔。
- ・充電がなくなると使えなくなる。
- ・別のサイトを見てしまう。
- ・目が疲れる。検索が少々遅い。

オンライン辞書については半数近くの回答で「使用したことがないのでわからない」があったのは意外だ。

筆者は「英語辞典の行方 電子辞書と i-Pad」(『英語教育の行方』[2011] 所収)において電子辞書の特徴について4点を挙げた(佐々木 a 136)。

- 1 紙の辞書に比べて高速検索が可能
- 2 大量情報を小さなスペースで集約
- 3 保管場所をとらない
- 4 検索が多様化

さらにその内容について次のようにも指摘した。

電子辞書は早く検索でき、収録語数も紙遺書よりも多いことが指摘されるが、長所は短所の裏返しとなることが多く、これは電子辞書の宿命かもしれない。データ量が多い分、真の意味で検索には時間がかかることはインターネットで検索したことのある人ならばわかることだ。電子辞書になりかなり限定されても状況はかわらない。スペースや携帯性については小型化された電子辞書には紙辞書はかなわない(佐々木 a 145)。

長所及び短所は他のものと比較することでより明確となる。紙辞書と電子辞書の場合にはこの両者の比較によりコメントが寄せられることが多くなるのもまた必然である。筆者は紙辞書と電子辞書の比較研究状況について紹介した(佐々木 e 145・147)。磐崎弘貞『英語辞書をフル活用する7つの鉄則』(2011)によれば、印刷辞書(紙辞書)と電子辞書使用効果については研究について、次のよう紹介している。

- 未知語に対して、電子辞書と印刷辞書を引いた場合、求める語義に至る時間はどちらが早いかな（単独語の検索時間の比較）
- 2語以上からなる表現に対して、電子辞書と印刷辞書を引いた場合、その語義に至る時間はどちらが早いかな（コロケーションや成句の検索時間の比較）
- 長い項目の下の方にある低頻度語義を調べさせる問題を与えると、印刷辞書と電子辞書ではどちらが求める語義に到達しやすいかな（情報の一覧性の比較）
- 電子辞書と印刷辞書を使って未知語を調べた場合、1週間後にどちらの場合が記憶に野きりやすいかな（記憶保持の比較）（磐崎 104）

学生の辞書に関する意識は長所・短所含め、紙辞書・電子辞書・スマートホン等内臓辞書、オンライン辞書に関する意識は英語辞書に限られたものではない。大塚みき「学生の辞書利用の実態についての小調査 6—外来語とスマートフォン—」（2018）でも次のようなコメントがある。

書籍辞書や電子辞書ではなくスマートフォンが用いられることのメリットは、いつでも辞書相当情報を携帯でき、手軽に調べられる点にある（大塚 95）。

調査結果は突飛なものでないことがわかる。学生は各辞書の長所と短所を理解しながら使用しているのだ。調査対象が大学2年生としているため、大学生として1年間は経験している上での調査であることも、学生の意識に何らかの影響があるのではないかと思える。大学1年間での授業等で使用の結果、電子辞書が増えている可能性もある。紙辞書が増えている理由は明確ではないが、紙辞書を使用している学生の電子辞書の短所の項目をみると、「費用」を挙げているものが多い。経済的な格差の影響のひとつとして捉えることができるかもしれない。高等学校時代に

電子辞書を持っていれば、当然、大学でも使用していることになるからだ。

また、学生の記述で気になるものとして、スマートホン内臓辞書の使用における短所である。

- ①授業中使うと怒られる。禁止されている。授業中に使うと、関係ないことに使っていると思われる。
- ②他のゲームをしてしまう。他の機能を使ってしまう。

①の記述は授業担当者の考え方が大きく反映されていることになる。小中学校ではスマートホンが制限されていることがほとんどで、高等学校でも何らかのルールや校則で制限されていることが多いだろう。震災や事故や事件この防衛としてのスマートホンの役割が大きいこともまた事実である。大学ではどうであろうか。ほとんどの大学が学内には wi-fi が整備され、学生には ID が付与され、大学専用のメールアドレスも付与されているのがほとんどだろう。これにより履修登録や成績、出席管理などをシステム化されているところも多くなっているだろう。

①については学生の姿勢が問題ではあるが、ツールのマイナス面ばかりを抑制しては折角のアドバンテージを生かすことができなくなる。また、学生は自分の意志の弱さも理解し、②の記述が出てきているのだろう。

3 授業とリサーチの在り方

筆者は 2004 年 4 月から 2017 年 3 月まで教務部長を務めていたが、その時に非常勤教員及び専任教員から学生の携帯電話（スマートホン）、タブレットの使用について苦情や相談を受けたことが数多くある。おもな内容は以下の通りであった。

- 1 携帯電話（スマートフォン）ばかりを触っている。
- 2 Youtube を見ている。
- 3 授業を聞いているのかどうか分からない。

こうした苦情・相談は語学というよりはいわゆる大教室で行われる授業で、比較的年齢の高い教員であることが多かった。大学教員をしていれば、どこかでこうした事例は遭遇することはあるだろう。筆者も立場上、教員には学生の非礼や良くないマナーである旨は謝罪するが、そのあとに以下のことを投げかけたり、筆者なりの考えを伝えることが多い。

- 1 一部を見て全体を判断しないで欲しい。学生は分からないことがあれば、調べようという意識もあり、手元にあるツールを使うと、それが携帯電話やスマートフォンであることが多い。
- 2 携帯電話やスマートフォンからインターネット経由で情報を得ることができる。
- 3 授業に興味がなくなれば、他のことを始めてしまう。手っ取り早く Youtube やゲームをするかもしれない。
- 4 90分という時間を単調にならないように、また一方的な授業にならないように、双方向な授業となるような工夫も必要ではないか。学生の活動を増やすような工夫、あるいはアクティブラーニングの要素をいれるような工夫が必要ではないか。

大学ではFDなどにより、授業の工夫等が取り上げられることが多い。筆者は「主体的・対話的で深い学びとは—総合的な探究の時間の教材の考察：超少子高齢社会を背景にして—」（2019）の中で、文部科学省のアクティブラーニングに対する考え方や導入の経緯について触れた（佐々木 e 3）。中心となる考え方は次の通りである。

従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である（中央教育審議会 9）。

筆者が英語辞書に関する学生意識を調査した目的は特に“Writing”を意識し、学生は英文を書く際に、うまく表現できない時にどのように辞書を活用しているのかをリサーチする目的があった。予習として事前学習するのは当然とはいえ、わからない、不明な点があれば授業中に調べる、リサーチすることについては筆者自身は学生に制限していない。むしろ、曖昧なままにせず確認することを推奨している。ひとつの単語の使い方、例文などを学生にホワイトボードに書いてもらうことがある。これは調べた出典（辞書、インターネット）により例文が異なるからだ。出典によりかなり異なった例文があることは学生はあまり意識していないだけに、これはかなり有効な方法である。オンライン辞書でどれが“Writing”の時に役に立つのかを知ることになるからだ。

4 学生にどこまで求めるか

“Writing”では次のようなことが意識されるだろうか。

- 1 文法的に正しい英文を書くこと。
- 2 より表現としてふさわしい英文を書くこと。
- 3 長文になれば、同じフレーズを連続して使用することはふさわしくはない。そのため、無生物主語を使用するような英文が入ることで単調さを防ぐことができる。

4 自分自身の文体を構築する。

母語でさえ4の段階に辿り着くことは容易ではない。このため、1～3を強く意識して“Writing”を行うことになるのだ。しかし、あまりにも1を強く教員が求め過ぎれば、学生はできるだけ短く、単調な文体、単調な内容となる傾向になる。高等学校までの取組にも大いに左右されるが、“Writing”で何を求めるのかを学生に示すことが重要である。筆者が担当している科目では受講者が英語を専門とする学生ではなく、どちらかと言えば、英語に対しては苦手意識を持っている学生が履修している。筆者が求めるのは以下の通りである。

- 1 A4サイズでPCの標準設定でエッセイとして最低12行～15行程度の英文。
- 2 主体性のある内容。

英文エッセイは長く書けば書くほど、ミスが発生する確率は高くなるため、長く書くことを推奨した。長く書くことによって学生がどのような傾向が見られるのかを集約すると凡そ次の通りであった。

- 1 主語と動詞が一致しない。日本語では「私」「あなた」が口語で省略されるため、そのまま英語にしている場合がある。
- 2 時制の混乱。おもに過去の出来事が多いが、過去、現在が混在することが多い。現在完了を使用している英文がなかなか書けない。
- 3 同一表現を繰り返して使用してしまう。

指導として2つの方法を行った。第1に全体へのフィードバックで概要を知らせた。特に無生物主語とする英文の書き方を事例として取り上げた。また、第2に提出されたエッセイに上記の1～3について具体的に

朱書きした上でフィードバックした。

ここで重要なのが“take”“make”“cause”等の動詞である。どのような使い方となるかを学生が使用している辞書で例文をそれぞれ当たらせた。また、厄介なのが形容詞の限定法と叙述法である。これはどうしても辞書例文等から情報を得るしかない。

5 辞書の活用

辞書はこれまでの用例を基に例文などを基に編集されている。磐崎弘貞『英語辞書をフル活用する 7 つの鉄則』（2011）では辞書の機能として3つを取り上げている。

- (1) コロケーションの提示：慣用的・意味的に他のどいういう語と結びつくかを示す。
- (2) 文法的型の提示：文法的にどういう品詞の語と結びつくかを示す：動詞型、名詞型、形容詞型などがこれにあたる。
- (3) その他説明の例示：語法上の問題、地域差、性差別表現の問題などを説明したり、比較対照するのに用いる（磐崎 15）。

辞書の活用を具体的に考えるにあたり樋口昌幸『英語辞典活用ガイド』（2012）は示唆に富む。また、実際に学生の英文エッセイでも誤用として見られるものがある。

形容詞の「限定」と「叙述」の区別である。辞書により差異はあるが、“present”は通例、「現在の、今の」意味で用いる場合には「限定」、「～が出席している、～に出席している」の意味の場合には「叙述」用法となる。（樋口 71・72）“poor”で「可哀そう、哀れな」の意味では「限定」で使用される。樋口は次のような例文を上げている。

My *poor* father was seasick the entire time. (気の毒に、父はその間ずっと船酔いしていた) [文脈によっては「貧乏な父」という解釈も可]
My father was *poor*. (私の父は貧乏だった) [×かわいそう[哀れ・不幸]だった] (樋口 75)

日本人が間違いやすい文法事項として、また、辞書で確認しないとわかりにくものとして、次のようなものも紹介されている。

文型

以下の用法に関して説明があるかないか：

×discuss about; ×explain him that 節; ×suggest to do; stop to do と stop doing を対比しつつ意味の違いが説明されているか (樋口 136)。

学生にとって分かりにくいものとしては他動詞と自動詞がある。例として“cheat”を挙げてみよう。

たとえば「彼は私をだました」ならば、He *cheated* me.といえるが、「彼女は試験でカンニングをした」は×She *cheated* an exam.とは言えないことがわかる。では、後者の場合はどういけばいいかという、動詞 cheat は後ろに名詞を取れないのだから、名詞を取れる語「前置詞」の助けを借りる (盤崎 54)。

実際には“*She cheated on an exam.*”と前置詞 on が来ることになる。上記以外で実際の学生の英文エッセイの誤用では、visit to 場所、visit there を使用したり、because of と because の区別がつかないなどの事例があった。

辞書により説明がない場合があるが、樋口によれば、これはその辞書

が劣っているのではなく、そのような辞書はそのような事項をすでに知っている人を対象として編集されている場合があるとしている（樋口 138）。そのため、指導者は辞書の特性をよく理解しておく必要がある。これは紙辞書であろうと電子辞書であろうと、辞書そのものの構成がどうなっているのかを理解せず、単語や熟語の意味を調べるためだけに辞書を使っている弊害でもある。

エピローグ

学生は電子辞書等を使用しているが、筆者の当初の見込みと大きく異なっていたのが、オンライン、インターネット上の辞典の使用状況である。今回のアンケートでは細かな質問はしなかったが、学生の多くが単語の意味を調べるために使用している例が多いということだ。例文などのところまで立ち入っていないのである。紙辞書にしる電子辞書にしる、辞書そのものの活用について理解していないことがわかって来た。単語を簡単に調べられる、荷物にならないという点で電子辞書を活用している事例が散見された。

大塚みきは次のように述べている。

デジタル世代であり、書籍辞書を使い慣れていないために意識の及ばない点について多少なりとも指導を加えることで、そのツールを正しく活用するスキルが習得され、それが多少なりとも指導を加えることで、そのツールを正しく活用するスキルが習得され、それが定着することで間接的に語彙力の向上につながる可能性も期待できるであろう（大塚 95）。

このことは反対にデジタルネイティブ世代（Prensky 1）であっても、必ずしもインターネットやデジタルツールを使いこなしているわけでは

ないことになる。現在の学生は紙辞書を十分に利用せず、かといって電子辞書やインターネットやオンライン辞典を使いこなしているわけでもない中途半端な状態ではないだろうか。これは、スマホはある程度活用できるがPCの操作ができないのとどこか共通している。樋口昌幸は『英語辞典活用ガイド』(2012)の「はしがき」で次のように述べている。

辞書には、これまでの英語研究の成果が満載されているのです。これらの成果を理解するためには予備知識が必要です。予備知識なしに辞書を引いたのでは、訳語を探すことだけに終始して、宝の持ち腐れになりかねません(樋口 vi)。

本来であれば、辞書を本格的に使い始める高等学校で行うべき指導かもしれない。しかし英語教育が使える英語、実用英語を重視するあまり、英会話を重視するあまり、「辞書を使う授業＝訳読中心の授業＝古い授業」といったようなイメージを持っていないだろうか。

筆者は大学の半期の授業で15分程度数回にわたり、辞書にまつわる情報を学生を伝える、あるいは学生の理解を図る試みをしている。「発音」「例文」は辞書により表記方法も異なる。例文の有無、解説の有無、すなわち所持しているツールにより差があり、英文作成時においては大きな差が生じるという現実を知ってもらうことが早道だというのが現時点での対応策だ。

引証資料

磐崎弘貞(2011).『英語辞書をフルに活用する7つの鉄則』、大修館書店。

大塚みき(2018).「学生の辞書利用の実態についての小調査6—外来語とスマートフォン—」、『実践女子大学短期大学部紀要』、第39号、実

踐女子大学短期大学部。

佐々木隆 a(2011). 『英語教育の行方』、イーコン。

佐々木隆 b(2017). 「英語教育の現状報告—授業の実践例から—」、『武蔵野教育研究』、第3巻第4号、武蔵野教育研究会。

佐々木隆 c(2017). 「教職課程の英語学に関する一考察」、『武蔵野教育研究』第3巻第5号、武蔵野教育研究会。

佐々木隆 d(2017). 「教育実践例 英語の語彙等に関する学生の意識—英語学の視点から—」、『武蔵野教育研究』第3巻第12号、武蔵野教育研究会。

佐々木隆 e(2019). 「主体的・対話的で深い学びとは—総合的な探究の時間の教材の考察：超少子高齢社会を背景にして—」、『高齢社会と地域』第2号、高齢社会研究会。

中央教育審議会(2012). 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf#search=%27%E6%96%B0%E3%81%9F%E3%81%AA%E6%9C%AA%E6%9D%A5%E3%82%92%E7%AF%89%E3%81%8F%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AB%27)(2018年5月29日アクセス)

樋口昌幸(2012). 『英語辞典活用ガイド』、開拓社。

Prensky, Marc (2001). “Digital Natives, Digital Immigrants”, *On the Horizon*, MCB University Press, 9-5. <https://www.marcprensky.com/writing/Prensky%20-%20Digital%20Natives,%20Digital%20Immigrants%20-%20Part1.pdf>. access on 20190922.

【キーワード】 英語辞書、紙辞書、電子辞書、スマホ内蔵辞書、オンライン辞書